

特集＝東日本大震災とアジアの私たち＝

「いっしょに歩く」という祈り

加藤 博道

『共に生きる』なんて言うけれど、共に生きることなんて出来ていないじゃないか。今から20年も前、一人の在日韓国人神学生の口から出た言葉でした。しかし続いて彼はこうも言ったのです。「だから、その共に生きることなんか出来ていないという現実を、一緒に見ていこうじゃないですか」。

教会の中でも「共に生きる」という言葉はよく用いられ、とくに今回の東日本大震災の発生後、テレビでも非常に多くの類似の言葉が繰り返されてきました。そして日本聖公会の大震災への取り組みの働きも「いっしょに歩こう！プロジェクト」と名づけられています。しかしこのいわば聞こえの良い、口当たりの良い名称を考える過程で、わたしたち、準備の関係者の中で交わされた議論は、冒頭の言葉のようなものでした。

東北地方の太平洋沿岸部、かつては栄えたとしても今は過疎化した町や、漁業が盛んとは言えけれど、高齢者が目立つ零細な第一次産業の町。そういう状況と日本の（今は経済不況と言われるとしても）高度経済成長、近代化は決して一緒に歩いては来なかったし、わたしたちの教会も、そういう日本社会の中の過疎化や零細な現実、丁寧に心を向けてきたわけではないと思えます。それを今さら復興・援助等と言えるのだろうか。東北の地でわたしたちが見ている現実「復興」とは程遠いものです。津波の直接の被災地の商店街は、今もシャッターがめくれあがり、無人で夜は



真っ暗ですし、そしてその通りは津波以前からすでにシャッター通りだったのです。復興とは？援助とは？

「いっしょに歩こう！」というプロジェクトの名前は、一緒に歩くななんて軽々には言えない現実を見つめながら、それでも少しでも共に歩ませてください、という祈りのようなものなのだと思います。そしてそれらの地には、独自の歴史と風土と誇りがあります。土足で踏み込んで「援助」するものでもないでしょう。そういう戸惑いを持ちつつも、この長い道のりを被災地の文化と現実謙虚に聴きながら、そして何よりも実際に顔と顔を合わせながら歩いていきたいと願うのです。津波の被災地の状況と、原発事故による福島県の状況とも、また異なります。一筋縄ではいかない状況に置かれた時こそ、教会の祈りと交わりの力もまた問われているのだと思います。

(かとう ひろみち 日本聖公会東北教区主教)

去る10月5日、都庁で開かれた東京都人事委員会を傍聴しました。岸田静枝さん(元小学校音楽科教員、清瀬聖母教会信徒)が停職処分を不当として審査請求をされたものです。中央に人事委員会審査員と審査補佐員二人、右手に東京都教育委員会の代理人二人と弁護士、左手には岸田さんと弁護士。傍聴者は40名弱で、私はその中央最前列でした。

東京都教育委員会は2003年、入学式・卒業式などの学校行事において「日の丸・君が代」を強制する、いわゆる10.23通達を出しました。これにより「君が代」斉唱の際の不起立、伴奏拒否によって処分される教職員が続出することになりました。岸田さんもそのひとりです。

岸田さんは音楽の教員として、入学式、卒業式のたびに「君が代」の伴奏を命じられてきましたが、良心に従ってこれを拒んでこられました。その結果数度の懲戒処分を受け、さらに定年退職間際には「停職1ヵ月」の処分を受けました。昨年2010年3月31日、教員生活35年の最後の一日は停職の中で迎えられたのです。

人事委員会で岸田さんは「天皇を君主としてたたえ、その国が万年も繁栄するようにと歌ったり、それを子どもたちに促すことはできない」「天皇を頂点として生れながらに身分の序列をつけるのはおかしい」「君が代が戦争の道具として使われてきた記憶は、今もアジアの人々に強く残っている」と証言されました。最後に勤務された豊島区立豊成小学校は児童の三分の一が外国人だそうです。

豊成小学校・小久保校長と豊島区教育委員会・朝日教育指導課長(当時)が、「学習指導要領に従って適正に」を繰り返したのに対し、岸田さんが子どもたちへの愛と教

「君が代」は伴奏できない——東京都人事委員会を傍聴して

井田泉

育への熱意を、信仰を交えつつ語られたのが印象的でした。

この数年間に受けた精神的苦痛は大変なもので、退職後も苦痛、恐怖がしばしばよみがえってくるそうです。けれども、自分が祈ることができないほど辛いときにも、祈っていてくれる人がいることによって支えられた、と言われました。「祈りは力だ」とはっきり感じると。

『日の丸・君が代』を国旗・国歌と認める人を否定したのではありません。私が主張し続けたのは、国旗・国歌と認められない私に対して、職務命令を出してまで認めさせ、私のこの手で伴奏をさせ、子どもたちに歌うことを強制させないでほしいと訴え続けただけです。」

聖書の言葉を思い出します。「兄弟としていつも愛し合いなさい。……自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちを思いやり、また、自分も体を持って生きているのですから、虐待されている人たちのことを思いやりなさい。」(ヘブライ人への手紙13:1、3)

今、大阪でも橋下知事と維新の会によって「強制」「処分」の嵐が吹き荒れています。私たちは礼拝において「立つこと」「歌うこと」を繰り返し行っているのですが、これが単なる形式ではなく、まごころからの行為であることを再認識したいと思います。そして信仰的良心から「立つこと」「歌うこと」「伴奏すること」の強制に苦しめられている人々、「心と行為は別物ではない」「私のこの手と、私の『君が代』への思いを切り離すことはできない(良心に逆らって自分の手で伴奏することはできない)」と訴えている人のことを大切に心にとめていたいと願います。

(いだ・いずみ 京都聖三一教会牧師)

大地は揺れても、笑顔でいこう!

朴思柔

● 確認出来ない同胞の安否!

コマプレス、東北へ

3月11日、未曾有の大震災発生!

同胞の安否はなかなか確認できず。宮城、山形、東京等に電話をかけ続けてもつながらない。地震発生から4日目、15日の午後、福島第一原発4号機の爆発と共に仙台の東北朝鮮初中級学校に到着。

40年も東北の子供たちの成長を見守ってきたはずの校舎の痛々しい姿が、地震の破壊力を物語る。大雪で校舎や運動場、周りの森も白く染められ、美しいはずの雪景色が、まるで「核の冬」を連想させる。

● 「宮城同胞支援対策委員会」は学校食堂

震度6強の揺れにビクともしなかった学校食堂は、日中は宮城同胞支援対策委員会の事務所となり、夜になると教員の寝室代わり。食堂の壁に、校長ソンセンニム(先生)の名スローガン「大地は揺れても、笑顔で行こう!」が貼り付けられる。皆、被災者とは思われないくらい明るく働く。ソンセンニム達やイルクン(常勤職員)達、皆、まるで友達のように、兄弟のように、息ぴったり。ウリハッキョ(私たちの学校・朝鮮学校のこと)を中心に成り立った在日同胞のコミュニティが、大震災の中、「同胞支援対策本部」として大活躍。

朝から晩まで、余震は止まることを知らない。いつ支援物資が到着するのか、いつライフラインが再開するのかもまったくわからない状況の中、同胞たちは、一日二食だけ食べながら節約したお米で、お握りを一つ一つ丁寧に作り、日本の学校や避難所を訪れる。「アルファ米わずか」、「クラッカー5袋」など、

非常食料の乏しかった日本学校や避難所の方々は、温もりがまだそのまま伝わってくるお握りや、バナナなどを受け取り、感謝と驚きの表情を隠せない。

同胞たちは、沿岸部の津波被害がひどかった地域までくまなく回り、(朝鮮)総連、(韓国)民団の区別なく、同胞がいるところなら何処までも支援物資を届けに行く。また全国から寄せられてきた支援物資を使い、日本の避難所で炊き出しをする。もともと仲の良かった日本学校や地域住民の方々は、「災難の中、近所にこんなお隣さんが居て良かった」と言いたいのか、炊き出し中の同胞の手を握る。そんな中、宮城県の村井嘉浩知事は、朝鮮学校への補助金を来年度から交付しないことを決定した。その理由として宮城県があげた言葉は「県民感情」。

● 「東日本大震災東北朝鮮学校の記録

2011.3.15 - 3.20

山形国際ドキュメンタリー映画祭にて上映

日本のドキュメンタリストとして世界的にも名声が高い、故小川紳介監督を中心に作り



解体される東北朝鮮初級中学校
(提供『東北朝鮮初中級学校』)

上げられた山形国際ドキュメンタリー映画祭で、今年『東日本大震災復興支援上映プロジェクト Cinema With Us ともにある』が、急遽編成されたという。今回大震災の時、日本学校や避難所には来てくれた給水車が当然のようにハッキョ（学校）には来てくれなかったことからわかるように、朝鮮学校は、そこに何十年も前から地域の一構成員として存在してきたのにも関わらず、まるで居なかったようにされている日本の現実。『在日』って言葉その通り、『日本に居る』存在であるはずなのに、まるで『居ない存在』として否定されている不条理な現実。仙台のど真ん中に『在日』が、『朝鮮学校』が存在して、地域の日本住民の方々のために、全員お昼なんか抜きにしながらもお米や食糧をわかちあって支援してきたことや、大震災に在日がどのように向き合ってきたのか、そのありのままの記録を世界に発信しなくてはと、あわてて編集に挑む。

さすが、山形映画祭。締め切りが終わった時点にも関わらず、『朝鮮学校の大震災記録も是非上映しなくては』と、緊急に編成を組み直す。

10月12日、山形映画祭閉幕の日、震災プロジェクトの末尾として「東日本大震災 東北朝鮮学校の記録 2011.3.15 - 3.20」上映！

東北ハッキョの校長先生が自ら山形まで駆け付け、上映後コマプレスと共に観客の質問に答える。『県民感情のため、宮城県が補助金を切った、という字幕が出ていたが、本当に県がそんな事をいってましたか』という質問に、校長先生は、『県民感情』とはっきりいってましたと証言する。

ご年配の女性観客は『日本人としてすごく恥ずかしい。これは日本の恥で、人権問題です』と力を込めておっしゃっていました。

日本の著名な映画評論家は『パリで見せませよ』と映像を一部コピーして行った。東京や横浜、大阪など日本各地から、この『東北

朝鮮学校の記録』を観るために来てくれたという日本市民の方々は、『是非地元で上映会を行いたい』と宣言。

北海道の朝鮮学校に住みながら撮影した映画『ウリハッキョ』の金明俊監督も『是非とも韓国で上映会をしたい！』と熱く語る。

今回一番大きい収穫は、大震災と向き合った同胞の姿と、朝鮮学校の置かれている日本社会の現実を世界に発信出来たこと。

オーストラリアの映画関係者は『英語字幕を入れて送って欲しい』と名刺を渡してきた。

●校舎は撤去され、瓦礫だけ残り

東北ハッキョの校舎は取り壊しが決まり、新校舎建設に向けての険しい道のりが始まっている。子どもたちは、大きな重機が校舎を壊し始めた途端、泣き出したという。『だから出来るだけ子どもたちに解体現場を見せないようにしてます』という先生。

東北朝鮮学校の出身も多いこの学校の若い先生方は、10年以上学んだり、教えたりした校舎が解体されていく様子を、毎日近いところから見届けながら胸を痛んでる。しかも再建費用の半額を負担するという決定があったものの、日本の行政は不透明な態度を見せている。ハッキョの子どもたちが一日でも早く安心して民族教育を受けられる環境をつくるために、市民連帯の力で、持続的で柔軟な支援をお願いしたい！大地は揺れても、笑顔で行こう！

(ぱく さゆ 小さな声 低い視線 コマプレス)

《募金の宛先》

仙台銀行 八木山支店 (普通) 1891841

学校法人宮城朝鮮学園 理事長 金進弘

震災の中で思ったこと

許 伯基

苦難から脱する祝福がある。一方で、苦難のただ中に生きることへの召しがある。この震災の中で、その思いを新たにしたい。

3月11日の甚大な津波被害とライフラインの寸断、電力不足、毎日何度となく繰り返す余震のなかで、東北・関東のどの教会も非常事態に瀕していたことは間違いない。しかし、在日韓国教会の抱えていた問題は、特有なものだった。それは、原発事故による放射能汚染を恐れた韓国人信徒たちの大量帰国であった。私の仕える教会では、大震災発生から2週間の間に6割の信徒が教会から消えた。同僚の牧師たちに聞くと、どの教会も状況は似たり寄ったりで、信徒の8割が一時帰国した、という教会もあれば、そもそも牧師自体が韓国に避難してしまった、という教会もある。おそらく彼らは、自分たちを苦難から救われた神に、感謝の祈りを捧げたことだろう。

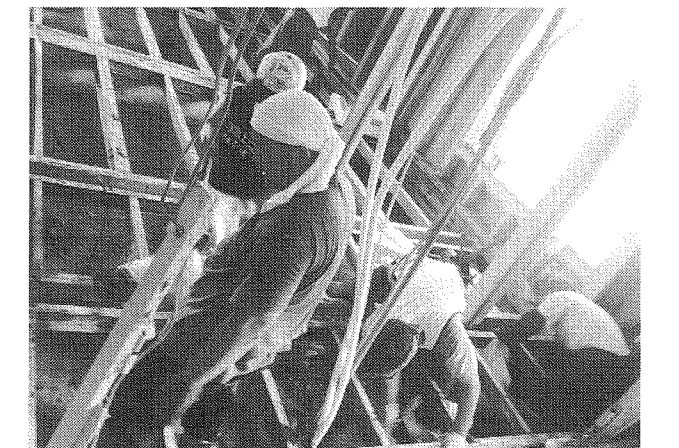
激しい虚無感に耐えて、わずか十数名の残った信徒たちと、ひっきりなしに起こる余震の中で礼拝を捧げながら、思った。他に帰るところのない彼女ら、壁面にひびの入ったこの礼拝堂でしか礼拝を捧げることのできない彼らこそ、この教会のからだである。「(イエスは)また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(マタイ 9:36) その時心に浮かんだ一節である。今この場こそ、牧者としていべき場所である、と悟った。すでに初期の被災地支援が各教派・教会によって活発に行われていたが、私は教会を離れることが出来なかった。残った信徒たちと共に過ごし、祈ることが優先と思われた。そう決断しつつも、より壮絶な状況の中に置かれている被災者たちより、目の前にいる信徒たちを選んだことに対する後ろめたさは、心の奥にこびりついていた。

そうした悶々とした思いを抱えながら、津波被害の爪痕がまだ鮮烈に残る東北に向かうことが出来たのは、復活節の翌日、4月25日のことだった。それ以来、在日大韓基督教会被災支援ボランティア

のチームリーダーとして、私は日本キリスト改革派東仙台教会が統括する東松島市東名・野蒜の住宅復旧支援のボランティアに9度にわたって参加した。想像を絶する景色の中で、全国、また世界の各地から集まってきたクリスチャン・ボランティアの人々と汗を流しながら、私は自分がその場にいる意味を考えた。現場でよく聞かれるキーワードは「寄り添う」であった。復旧作業においてもっとも大事なのは、作業の効率でもなく結果でもない。実際、素人たちが手探りで復旧作業をそういう視点で測るならば、その有効性などたかが知れている。結局は自分たちの手で復興に立ち上がらなければならない被災地の人々の苦しみ、痛み、悩みの現場にもいること、茫然自失の人々が、ふたたび強く生き始める「きっかけ」作りのために、お節介を焼くこと、それが私たちに出来る全てであった。その作業が物理的に役立つ作業になるかどうかは別にして、被災地の人々に寄り添い、彼らが歩こうとする方向へと共に歩く。そのために自分はここにいるのだ、と、活動の中で教えられた。

「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群れ」を深く憐れみ、寄り添って共に生きた主イエスに続く者として、私たちはその場に呼ばれ、召されている。余震に揺れる礼拝堂で残った信徒たちと恐れおののきながら礼拝を捧げた時と同じように、私はその場にイエス・キリストを強く感じた。

(ほ べっき 在日大韓つくば東京教会 牧師)



日本聖公会東日本大震災被災者支援 「いっしょに歩こう！プロジェクト」

池住 圭

日本聖公会では、中・長期に亘る支援活動のため5月6日に仙台（本部）オフィスを開設、「いっしょに歩こう！プロジェクト」を開始致しました。

本プロジェクトの活動方針の一つに「震災被災者のうち、特に困難のある方々に思いを寄せて活動を行います（高齢者、子ども、障がい者、在留外国人、貧困層、難民・・・）」とあります。この方針に従って、私は在留外国人被災者支援の担当に任せられ、彼ら、彼女らとその家族の被災状況や、私たちに何ができるかを知るための調査を開始しました。被災直後（3月15日現在）の岩手県、宮城県、福島県の外国人登録者数は、それぞれ6,077人、15,620人、11,085人で、国籍別では多い順に、中国、韓国、フィリピンです（法務省HP3月より）。特別永住者に加え、お嫁さん不足に悩む農漁村に自治体や仲介業者のあっせんで嫁いで来た女性も少なくありません。

この調査を通して、盛岡市、気仙沼市、大船渡市、陸前高田市、南三陸町、仙台市などで1970年代後半から2000年代にかけて、主に韓国、中国、フィリピンから日本にやって来た人たちに会いました。その多くが日本人を配偶者に持つ女性で、子育て真っ最中の人でも大勢います。また、義父母と一緒に生活をしている人も少なくありません。嫁ぎ先の家族の一員として地域社会に生活基盤を据えて生活しています。これは、多くの都市型外国人集住地域とは異なる点でもあります。

被災直後、彼女たちに一番困ったことを聞いてみると、ほとんどの人が言葉の壁を挙げました。また、「被災時の辛い体験や、心に深く残る思いを母語で思い切り語り合いたい」との声もあがりました。日本語は生活の中から体得しているので、普段はさほど不自由なく暮らしています。しかし、非常事態ともなると全く別です。被災直後の緊急避難誘導アナウンスが理解できませんでした。避難所に貼り出された、家族の安否や物資の受け取り場所などが書かれた、漢字いっぱいの見物も読めませんでした。生命や安全に関わる重要な情報が、一番必要な時に届かなかったのです。



日本語を学ぶ被災したフィリピン人。彼女たちへの支援は日本人と同じではない。それはとても大切なことだ

「大勢の人が周りにいながら、子どもを抱えて恐怖と不安の中に置き去りにされたよう感じた」と、その時を振り返る人もいました。「言葉の壁」が「心の壁」になってしまっていたのです。「高台に至急避難して下さい」が「大急ぎで高い所に逃げて下さい」のように、避難誘導がもっとやさしい日本語でアナウンスされていれば、掲示物に仮名が振ってあれば、充分理解できたはずでした。

被災後、半年余りが経過し、外国籍住民を迎え入れている地域社会特有の課題が、ますます顕在化して来ています。このような状況は、歴史や来日の経緯が違ふとは言え、特別永住者先達の多くが苦勞して来たことと、さほど変わらないのではないかと感じています。言い換えれば、何十年も同じ課題を抱えながら充分改善されて来ていないのです。

今後、どのように地域の再創造を進めて行くかが問われています。この根底にあるのは、国籍・信条を超えた一人ひとりの繋がりです。その意味で被災後、より深くなった顔の見える関係を大切にしながら、私たちのできることを一つひとつ積み重ねて行くこと、同時に外国籍住民を特別視することなく地域に迎え入れ、言語や生活習慣の異なる人たちが安心して、豊かに暮らせるような、地域に応じた仕組みを作り直すことや、政府、地方自治体に提言していくことも、被災者支援を通して外国籍住民の一人ひとりに出会った私たちが、今求められていることではないかと思えます。

（いけずみ けい 運営委員・外国人被災者支援担当）

人こそ最大の支援

金光敏



多くの人と物を奪い去った地震と津波。人間の復興を一番大切にしたい。

「多様性教育」を被災地の教育復興のテーマにしてはどうか。宮城県の大学を訪れた際、ある教員が「学生らと祖父母世代間で言語の共通性が損なわれている」と述べた。東北の言葉が次世代に引き継がれず、日本の歴史多様性を象徴する一つである東北文化でさえ東京発の均質文化に染まっている。私は東北の独自性を復活させることで「多様性」を蘇らせてほしいと考えている。

今回の東日本大震災では学校も安全でなかった。授業はすでに再開しているが、通常授業が難しい被災校も多く、学力への影響が心配されるが、どのような環境でも年度を越えれば子どもたちの学年は自動的に進級する。授業の補充も手当てされているが、自動的に進級するという学齢主義原則は揺らいでいない。私は年齢に合わせ学年が決まる学齢主義をやめ、いつでも学び直おせる生涯教育型の学校を提唱している。

法律による一学級当たりの定員がOECD平均より日本は多い。そうした中で教員は一方通行の指導法をとらざるをえなかった。児童生徒は黒板写しに忙しく、教員の指導に沿う子がよくできる子であった。だが、被災地では今、生活拠点を転々とし、過去の学びの記録を失った子どもも多い。子どもたちの環境は大きく変化した。これまでの学校像を今一度見直す必要が生まれている。

政府は今年4月、被災4県に383人の教員加配を措置し、今後さらに増員するとしている。阪神淡路大震災時の教員加配は、震災15年目にして廃止されたが、今回の被災地への教員加配は恒久化する

必要がある。その上で被災県の学級定員を弾力化し、その財源は国から自治体に委譲する。教員配置の独自化で複数担任制や習熟度別学習を後押しし、指導に余裕が生まれる教員が、家庭支援のため福祉や医療機関との地域連携を進める。

さらにもう一つ提案したい。学習単元をどの程度理解したかをもとにして、場合によっては同じ単元を再履修できる課程主義への転換だ。現状のように学年を固定化したままの「学び直し」は「留年」との印象があり負担感は大いいため、学年を柔軟に捉え、義務教育制度を11年間程度に伸ばし、この授業では6年生の算数だが、次の授業では5年生の理科をと、苦手な科目や単元の「学び直し」を可能にする。OECDのPISA（学力国際比較）調査で上位を占めるフィンランドの「学び直し」がモデルだ。

重要なことは多様な学び方を支援するという点であり、被災地の子どもたちは、困難の中から「日常」を回復させ、「遊び」を再開させている。子どもの「遊び」は「学び」を意味し、被災地の子どもたちの「学び」が均一化した教科書の枠組みに戻ったり、子どもらの「特別」な経験が標準化された既存の学校教育に沈みこまないようにしなければならない。

子どもの「学び」を幅広く捉え、痛手を負った東北の現場からこそ、今までになかった創造の教育を生み出してほしい。

（きむ・くあんみん 特定非営利活動法人コリア N G Oセンター事務局長 / 教育コーディネーター）

“日本”への祈りを

中村 香

地震＝日本から韓国へ＝

2011年3月11日、私は神戸にいた。テレビで津波に飲みこまれる東北を見ていた。15日には予約してあった飛行機に乗って、韓国に戻った。日本は福島第一原発4号機が水素爆発をするかしないかで緊迫していた。家を出る直前までテレビを見ながら、どうかこの爆発を止めてくれるように、放射能が漏れないようにと、祈っていた。韓国に戻るのはまるで日本を捨てて行くようで、上空でビールを飲みながらジュルジュル泣いた。自分は何ともなかったのに、神戸は何ともなかったのに、東北が、日本が痛みに合ったとき、自分も痛いことに驚いた。自分が日本の一部であり、日本人であることを痛感した。

韓国に着いた。リムジンバスに乗った。バス前方のテレビに映っていたのは韓国ドラマだった。当たり前だ。当時日本では緊急生中継しかしていなかった。定時になってニュースが始まった。4号機がポッカーンと爆発した映像だった。私はその場で声を押し殺して号泣した。バスの中は韓国人、外国人がいて、おしゃべりしている人、携帯電話で話している人、寝ている人、様々だった。しかし今、この日本のニュースを見ている人は誰もいないように思われた。当たり前だ。それが外国に住むということだ。分ってはいるつもりだが寂しくて悲しく、ああ、私は韓国に戻って来てしまったんだという実感に、おいおい泣いた。

テレビに映る地震と津波の映像は日本では見たことの無いものばかりで、目を見張った。外国や韓国の報道が撮った映像だろう。「普段でもこれ流しちゃっていいの？」的な映像が多い韓国だが、凄まじい瓦礫の中を進む救助隊、モザイクのかかった遺体に、胸がえぐられるようだった。その頃の日本はショックを与えないようにと報道規制を

とっていたようだが、今となっては事実を明らかにしない隠蔽作戦にとってかわっている。続いて原発特集が流れ、原発の構造が3Dでそれは綺麗に分りやすく説明されていた。厚紙に描かれた原発の図に矢印を書き込み、あくせくしながら説明していた職員の姿が思い出された。バスを降りて吹きつける夜風は、冷たかった。

タクシーに乗った。行き先を告げると例にもれず日本人とバレた。バレたとたんアジョシ（おっちゃん）は言った。「日本があんなことになってしまって、、、」。その表情と言葉に心から心配してくれていることが分かった。ああ、こんな人もいてくれるんだとまた涙ぐんだが、それはアジョシだけでは無かった。ウムソンに帰ってみたら、村のハルモニ・ハラボシ（おばあさん・おじいさん）、教会の人々、行きつけの食堂のアジュンマ（おばちゃん）、通りすがりの人までが私を、日本を心配してくれた。私の留守中、夫の携帯にはありとあらゆる人から電話が来たという。ハルモニは言った。「カオリのせいで、死ぬほど心配したわ!」。そしてそれは韓国だけではなく、全世界が日本人の想像を遥かに超えて心配してくれた。日本のためにと韓国の一般市民、政界、経済界、芸能界の著名人たちが募金をしながら応援メッセージを送る放送がずっと流されていた。この放送を日本人が目にするには無いんだろうなと思いつつ、私は予想外の反応に驚きながら、感動していた。

原発＝伝えられなかった情報

しかし突然雲行きが怪しくなった。日本が放射能の汚染水を海に流す際、アメリカには一報したのに隣国である韓国に何の報告もなかったのである。事前にも事後にも。これでは韓国は無視されたといえようが無い。抗議をしたところ、よ

うやく日本大使から説明と謝罪があった。そして歴史教科書問題、独島・竹島問題。日本でのこれらの取り扱われ度が1としたら韓国は100である。色々な説が飛び交う中、ラジオから聞こえてくるのは「やっぱり、日本に裏切られた」、という声であった。私は急にどうしたらいいのか分からなくなって、韓国人に会う度にドギマギした。それでも日本を心配してくれるのが韓国人の情なのである。

その頃韓国の農民団体“正農会”の母体である、日本の“愛農会”（交流が数十年間続いている）の知人から郵便物が届いた。東北大震災の写真集と手紙が添えられていた。そこには、汚染水と竹島問題で韓国の皆さんに不快な思いをさせているのに、福島にイ・ミョンバク大統領が訪問し励まして下さり感謝している（夫に言ったところ、苦笑していたが）、写真集、村の皆さんに見せてあげてください、とのことだった。私と全く同じ思いであったのにびっくりした。そういうふう言ってくれる日本人がいることが有難かった。驚いたのは、彼が福島は郡山に住んでいることだった。そして60年間も続けてきた有機農業がもう続けられないかもしれないということだった。私はたかだか4年生の農民だ

が、同じ農民として涙が止まらなかった。今年は豊作だという。愛農会の会員はもともと食の安全に敏感だから、買わないだろう、とのことだった。売ってもならない、それが有機農の農民としての思いでもあるだろう。

放射能の被害は福島、日本にとどまらず、世界に影響を及ぼしているという事実を、日本人は知っているだろうか。

栃木県、民間稲作研究所所長である稲葉光国先生は、「有機農業による放射能汚染の克服と脱原発」を掲げ、放射能除染対策として「大豆・ひまわり・菜の花プロジェクト」の運動を進めている。常にセシウム観測機を携帯しているのだが、7月、韓国に来てセシウムの数値を観測したところ、当時栃木では0.13ベクレルだったが、上空で0.38に上がり、ソウルでは何と0.18の値が出て衝撃を受けたという。栃木よりソウルの方が高かったのだ。10月には、日本上空で1.33（ホットスポットと推測される）、ソウル市内は0.12だったという報告を、韓国で直接聞いた。原発事故当時、風向きが太平洋側だったからまだしも、確実に東アジアに影響を与えている、とのことだった。これはどういうことなのか。



郡山セントポール幼稚園では毎日朝夕に除染作業をしている。この作業はいつまで続き、安心した地域になるのか？

「スイマセンデシタ」ではすまされない。それでも原発を再開しようとする日本は、国内でも出来得ない国外への責任を果たしうるのか？日本人は今回の原発事故を見てもなお、何を信じて地震列島日本に原発を置こうとするのか？広島・長崎は何だったのか？平和ボケの日本人よ。

日本が世界と地球に犯した罪はあまりにも、重い。大体目に見えない神を信じている私たちキリスト者は、愛とか心とか、もしくは地球とか宇宙とか、見えない大切なものを感じる感性を養うべきではないか。目に見えない危険な放射能も、感じ取らなくてはいけないのではないか。

備え＝今こそ！

ここに来て話がブツ飛ぶが、韓国に今回の東日本大震災、津波と原発事故を、信仰により予言した人がいる。私は地震が起こる一ヶ月前に、日本に大きな災いが起こるであろうことを知らされていた。日本の為に祈れと言われていた。訳も分からず漠然と祈っていたら、東北大震災が起きた。知らされていたのに何もできなかった。

今私たちが知らなければいけないことは、日本列島の下がマグマで煮えたぎっていていつどこで地震が起きてもおかしくないこと。2、3年のうちに、富士山系火山が噴火して再び地震が起きるかもしれないということ。起こればその規模は東日本大震災より大きい。

何も彼だけが次に来たる地震のことを言っているのではない。多くの学者たちが次は関東大地震、富士山系火山の噴火が起こることを声にしてしている。しかし関係者によると、マスメディアにとりあげられることはあり得ない、という。日本のマスメディアは今、徹底的な事実隠蔽を図っている。日本がパニックに陥るから？

私たちは選択すべきである。何も知らされずに漠然とした不安の中で災害に合うか、自ら真実を探り出して災害に備えるか、を（放射能問題についても同じことが言える）。

不安を煽り立てようとしているのではない。今回の東日本大震災で、都心は大パニックに陥った。関

東大地震が何十年も前から言われているのにも関わらず、その対策は全くなされていなかったではないか。実際地震が起こるかどうかは別として、今の時代、日本に住む者として災害の備えをすることは必須である。

富士山系火山が噴火したことを想定し、実際の被害を予測すること。被害が大きいと思われる所は、避難（引越し）を考えること。地震が起こった時の避難場所、必要なものを準備すること。各団体は予め関東にボランティアセンターを設置し、救援物資やボランティアを派遣できる体制をつくり、避難時に迅速に行動できるよう、準備すること。「備え」ること、災害が起こってもそれを乗り越えられる知恵と力を蓄えること。東日本大震災で大きな被害を受けた日本が、次の大震災で共倒れになるかも分らない。しかし、災害に全力で備えることでそれを乗り越え、逆に世界を励まし引っ張っていく、そんな日本になりはしないか、、、

祈り＝真紅の祈りを

私の唯一の発信源は、このウルリムしかない。恥を忍んで書いている。ここしかないと思って書いている。次に来たる震災も、私は又何も出来ずに、ただ指を加え涙を流し見ているだけなのか。私はこのウルリムを通して、次の地震の“備え”を、避難を呼びかけたい。一人でも多くの人の命を、助けたい。そして何よりもそれを渴望しているのは、神である。

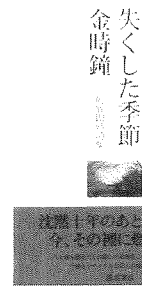
今、日本に住む人々の“日本”に対する、真紅の祈りが必要である。私たちキリスト者は祈ることを知っているではないか。自然災害は不可避なものだが、どうか被害が小さくなるよう、どうか一人でも多くの人が助かるよう、真剣に祈らなければならない。心をついにし、想いを一つにして、“日本”の為に、神に祈ろう。そしてその祈りが、一人一人の行動につながることを願う。

7年間の韓国生活を終え、私たちは来年、日本に行くことにした。日本に行って自分たちが何ができるのか、何をすべきなのか、考えたい。

(なかむら かおり 韓国在住)

金時鐘四時詩集『失くした季節』（藤原書店）

磯貝 治良



四時詩集の四時（しじ）とはなじめのうすい言い方だが、四季のこと。ふつう四季を言うときは春・夏・秋・冬の順に言う。しかし、この詩集では夏・秋・冬・春の順に並べられて、それぞれ8篇ずつの詩が収められている。詩人金時鐘にとって、その季節のめぐり順は決定的な意味を持つ。

1945年の夏こそが金時鐘の存在をめぐり起点となったからだ。それは無条件に「解放」の歓喜に沸く人生の回天ではなかった。日本帝国の侵害によって損なわれた思考と存在をいかに生き直すか、その苦節の起点であった。

同時に、収奪されたものを奪回するための、詩作と詩想の起点でもあった。以来60年余にわたる詩作を経て、日本語詩の領野に屹立する。小野十三郎の詩と詩論に導かれた詩作は、いまや金時鐘独自の詩法と詩論として語られねばならない。

1999年発表の2篇のほかは2000年代に発表された詩と書き下ろしによって構成。紙数を限られて抄引にならざるをえないが、「夏」の章から「待つまでもない八月だと言いながら」の最終連を引く。〈それほどにも深い記憶のために／うすれた記憶だけが残されたのだから／光った夏の日の底で／^{かき}手^の欠片に夏はなってしまったのだから／夏は

欠片が刺さった記憶なのだ。／白む間もなく夏は明けてしまうので／ようやく寝ついた妻の寝息に／ぼくもついて目をしばたきながら／^{かき}空^{まじ}りに／故もなくこみがって来るのを嘸みくだしながら／しののめにほの白くかすんでしまっている眼で／そう、夏はまだ咽^{のど}んでいると／そっぽを向いている彼に重ねて返してやったのだ。〉

詩集を読むと、半世紀余をこえて、いまも「あの日」が詩人の詩題でありつづけていると知れる。そのことは済州島「4・3」史もそうだ。ユギオ（朝鮮戦争）もそうだ。光州事態もそうだ。そして、解放後65年の歳月を経た〈在日〉の今が幾篇もの詩に刻まれている。さらにまなごしはイラクなど世界へも注がれる。気に入った詩のいちいちを引例できないのが、じつに悔しい。

詩集のタイトルについて詩人は「金時鐘抒情詩集」とも考えたという。詩そのものがリズムでありリリズムであるのだから、それを「抒情」と呼んでいいはず。この詩集もまた、本質的な意味の「抒情」だろう。

金時鐘の詩は「日本的／短歌的抒情」を峻拒してきたのであり、いわば「もうひとつの抒情」に詩精神を賭けたとも言える。そこに起ちあらわれるのが、批評としての詩語／詩法とリズムであると思われる。批評精神が「抒情」を超えてさらに「抒情」へ、とも言えるだろう。

では、金時鐘詩の批評が生まれる在所はどこか。それは自己あるいは世界／事象を対象化する力であると思われる。詩について門外漢ではあるが、以上が金時鐘詩を読んできて、今回『失くした季節』を読んで、わたしが思ったこと。金時鐘詩のメタファー＝喩とアレゴリー＝寓意についてもあれこれ考えたが、省略せざるをえない。

良質な批評精神にはヒューマン／ユーモアがあって、この詩集にもそれがある。詩人が時にいたずらっぽい少年の笑みを浮かべて、辛辣な批評のコトバを放つ光景を、わたしは連想し、愉しんだ。

(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)

齊藤 壹

中学校の同窓会(同期会)が行われ、久しぶりに出席してきた。参加してみて気付いたのが「卒業50周年」ということで、もう半世紀も時が経ったのかという感慨もあった。阪神淡路大震災の被災地のど真ん中・芦屋にあった中学で、仲間とは、思い返せば大震災から少し落ち着いた10数年前に会ったきりだった。高校の同期生には、そこが公立高校であったが3人の牧師が出ていた。中学の同期で牧師になっているのは私だけ。珍しさも手伝ってか「齊藤君、牧師になってよかった?今どこにいるの?」なんて尋ねられ、待ってましたとばかりに、「良かったと思ってるよ。・今、焼肉の町・鶴橋にいるけ

鶴橋に住んでるんやけど:

ど・来たことある?コリアタウンも近いよ。」と返答した。「いや、行ったことない。ニュースの映像などで見たことあるけど、こわいことないん?」と言う。「いやいや、それってどこかで偏見がインプットされてるんと違うんかな?フレンドリーなおもしろい町やで。いつでも案内するよ。」って言ったら、「ほんまに行ってもええの?何人かに声を掛けてみるわ」ということになった。同窓生が60歳代半ばにして一度も来たことがない生野に来る。いろんなお話ができそうで私の心はワクワク。このウルリムが発行される頃にはフィールドトリップも終わっていることでしょう。神様がくださった楽しい出会いに感謝。

(さいとう はじめ)

余韻

■3月の震災から半年以上経って「震災特集」のウルリム。どの原稿も文面に、行間に苦しみとそれに立ち向かう思いが伝わってくる。“聖公会生野センターらしい”震災の号にしたいと思って敢えて偏りを全面に出したつもりである。■私が一番怒っているのは“棄民”。原発事故が多くの人を捨て去っている。これでこの社会は希望があるのだろうか?東北の朝鮮学校が十分な支援を与えられない状況。これこそ「ヘイトクライム」ではないのかと言いたい。「共に生きる」ことがたやすくなく、そしてそれを阻もうとしている力を感じつつ大阪にしながら悶々としている私がいる。“棄民”という言葉が被災地の人々、原発事故の被害者、そして在日、滞日外国人に負わせてはならない。■10月に済州島にいった「在日済州島人1世故郷訪問事業」のつきそい。28年ぶりの姉妹の再会を目の当たりにし、故郷の空気のためだろうか?元気に踊り出したり、帰りたくないどだをこねるハルモニの姿を見て8年前に亡くなった済州島1世の母を思い出した



久しぶりの故郷訪問のハルモニたち。済州島の人たちは「昔、在日同胞に助けられたホンの恩返しです」と心から言っていました(感謝)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 10,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円から
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
 - 普通預金 4654965 「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所: 聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3丁目11番19号

TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人: 大西 修

編集人: 大橋 襄

ウルリムは再生紙を使用しています。